別添４−１４

令和４年度　厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
分担研究報告書

痛みセンターを中心とした慢性疼痛診療システムの均てん化と診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者　　杉浦　健之　名古屋市立大学大学院医学研究科　教授

研究要旨
当院いたみセンターは、開設後５年が経過した。今回、６年目に入る 2022 年度のいたみセンターの診療状況を調査し、その活動実績について報告した。2022 年４月１日から、2023 年３月 31 日に、いたみセンターにて診察した患者数は、延べ 4349 名、初診患者は 195 名で、うち慢性痛の新患は 98 名だった。慢性痛患者への治療介入には、多職種の協力がなくてはならない。全国の痛みセンターと協力しながら、診療技術のアップデートが必要であると共に、地域医療スタッフへの教育や研修も継続的に行い、マンパワーを充実させていくことが重要である。全国各地域において、痛みセンターの開設が毎年、確実に増えてきている。慢性痛診療を行う連携施設も徐々に増えてきていることは、患者にとって大変喜ばしいことである。痛みの診療は各診療科にまたがる幅広い領域となるが、整形外科、麻酔科、内科の連携施設に加え、精神科・心療内科の専門家に加わっていただくことも、重要かつ喫緊の課題と考える。

Ａ．研究目的

我が国の健康づくりの取組として、慢性疾患への対策、中でも、症状に着目した横断的な対策として「慢性の痛み」に対する取組の必要性が指摘されている。厚生労働省では、有識者をメンバーで「慢性の痛みに関する検討会」を開催し、慢性の痛みに関して、早急に医療体制の整備や医療資源の適正配分、社会的損失の軽減に寄与する取組を開始するよう、提案がされた。当院では慢性痛診療を行うため、2017 年４月に多職種診療を柱とした“いたみセンター”を開設した。2022 年度のいたみセンターの診療状況を調査し、活動実績について報告する。

Ｂ．研究方法

対象は、2022 年４月１日から、2023 年３月 31 日の一年間に、名古屋市立大学病院いたみセンターを受診した患者とした。

1)いたみセンター診療について

初診で診察した慢性痛初診患者の自己記入式問診結果、慢性痛診断、いたみセンターで施した集学的治療について検討する。

2)診療連携について

慢性痛新患の紹介元の施設に関して、院内診療科、院外の連携施設、非連携施設について、検討する。

3)多職種カンファレンスについて

毎週、開催している多職種カンファレンスで取り上げた症例数を検討する。

4)研修会について

慢性疼痛診療に関連した研修会での医療者教育活動、および自己研鑽の詳細を報告する。

（倫理面への配慮）

個人を同定できるデータは用いず、項目毎にまとめた施設内のデータ紹介にとどめているため、倫理面の問題はないと判断した。iPad を使用した問診票は、名古屋市立大学大学院医学研究科倫理審査委員会の承認を受け、実施している。

Ｃ．研究結果

1)いたみセンター診療について

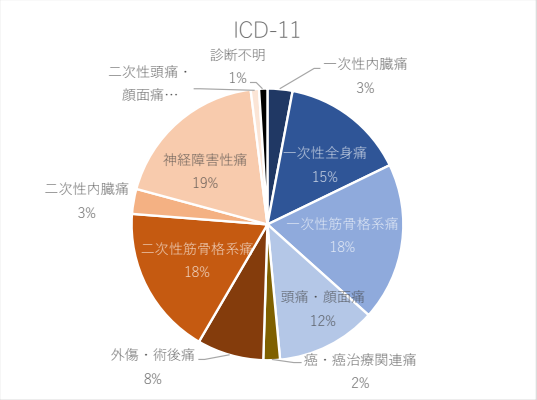
①慢性痛診断（ICD-11）

2022 年４月１日から、2023 年３月 31 日に、いたみセンターにて診察した患者数は、延べ 4349 名、初診患者は 195 名で、うち慢性痛の新患は 98 名だった。慢性痛診断では、慢性一次性筋骨格系痛 23 名、慢性一次性顔面痛 12 名、慢性一次性全身痛 9 名、慢性一次性内臓痛６名であった。慢性二次性筋骨格系疼痛 20 名、慢性神経障害性疼痛 16 名（中枢３、末梢 13）、慢性外傷後（5）・術後痛(4)9 名、慢性がん関連痛１名、慢性二次性内臓痛１名、診断不明１名であった。

患者自己記入式アンケートの結果から、それぞれの平均値（範囲）は、痛み NRS 5.7（1-

10)、不安 8.0（0-21）、抑うつ 8.7（0-21）、疼痛生活障害評価尺度 23.4（0-52）、痛みの破局化尺度 35.2（6-52）だった。

	R1	R2	R3	R4
急性痛初診	81	62	54	97
慢性痛初診	110	93	110	98



②治療介入

いたみセンターでは、薬物療法に加え、神経ブロック、理学療法、心理療法、患者教育など、多職種で介入を行なっている。また、他科への専門科診察コンサルトや栄養相談への依頼も行っている。いたみセンターでは、日本東洋医学会専門医が担当する漢方外来も担っており、エキス剤を用いた漢方処方による治療患者も多い。調査期間内で神経ブロックを行った患者数は延べ 644 名、心理療法等の介入を行なった患者数は延べ 460 名、理学療法を行った患者数は延べ 228 名だった。

	R1	R2	R3	R4
神経ブロック	879	658	651	644
心理療法	636	607	483	460
運動療法	129	141	190	228

2) 診療連携について

①院内連携

1. 慢性痛紹介 49 名
2. 16 診療科：整形外科 13、こころの医療 6、神経内科、皮膚科 5、膠原病内科 4 など

②院外の連携施設

1. 慢性痛紹介 49 名
2. 名古屋市内 23 名、愛知県内（市外）17 名、三重県 6 名、岐阜県 3 名

うち、連携施設からの紹介 12 名

診療科：ペインクリニック 9 名、精神科・心療内科 9 名、整形外科 7 名、内科 13 名、小児科 2 名、在宅 2 名、脳外科 2 名、そのほか 5 名

3. 連携施設カンファレンス・コンサルテーション

名古屋栄ペインクリニック全 7 回　講義＋症例検討

04/25　動機づけ面接
05/30　OARS－聞き返し－
07/25　OARS－開かれた質問，是認－
09/26　OARS－要約，EPE：情報提供－
10/31　チェンジトークと維持トークの認識
11/28　チェンジトークを引き出し強化する
01/30　チェンジトークを引き出し強化する

山之手痛みと内科のクリニック全 4 回　講義＋症例検討

09/17　慢性疼痛の心理・社会的要因とその評価法
11/26　慢性痛患者との効果的なコミュニケーション 1
12/10　慢性痛患者との効果的なコミュニケーション 2
01/28　慢性痛患者との効果的なコミュニケーション 3

3) 多職種カンファレンスについて

毎週木曜日に開催する多職種カンファレンスでは、医師（麻酔科、整形外科、精神科、緩和ケア部）、看護師（いたみ専門医療者）、臨床心理士（いたみマネージャー）、理学療法士、薬剤師が参加している。2022 年度は、初診の患者を中心に 185 例について、他職種で症例カンファレンスを行った。

4) 研修会について

①慢性疼痛研修会での医療者教育活動

1. 痛みの診療最前線 2022～カラダとココロの両面からのアプローチ（オンデマンド動画配信企画）

参加人数： 55 名　医師(13)、看護師(12)、理学療法士(10)、作業療法士(1)、社会福祉士(5)、薬剤師(6)、助産師(2)、その他(6)

2. 第 3 回慢性疼痛診療研修会 Up-to-date（オンデマンド動画配信企画）

参加人数： 121 名 医師（39；ペイン 32，整形 2，精神 5），歯科医(3)，看護師(15)，理学療法士(34)，作業療法士(1)，薬剤師(11)，臨床心理士/公認心理師(10)，

3. 愛知県慢性疼痛診療研修会　講師

2023.02.28（岐阜）
②自己研鑽
1.ペインクリニック・インターベンショナル治療カダバーハンズオンセミナー(2日間コース）2名（麻酔科医）
2.施設見学　痛みセンター外来診療：他施設見学2名（理学療法士）

D．考察

当院いたみセンターは 2017 年にペインクリニック外来の診療スタイルに多職種が加わり、慢性痛の紹介患者受け入れてきた。いたみセンターにて診察した患者数は、横ばいとなっていた。現在のマンパワーや診療体制では、患者受け入れが飽和状態であり、何らかの対応策の必要性を感じている。これまで、慢性痛初診のすべての患者に対してスクリーニング的にいたみセンター専門医療者による診察が施されていたが、今後は必要と考えられる領域に限定して診療を始め、適宜、足りない部門の診察を追加する方針を考えている。さらに、効率よく診察できるように、いたみセンター紹介のクライテリアを確立したい。

慢性痛初診患者を痛み強度 NRS で評価すると、重症（NRS 7〜10)、中等症（NTS 4〜6)、軽症（1〜３）は、それぞれ 33 名、42 名、22 名であった。痛みの強度が軽症の患者でも、いたみセンターの診療を希望されたり、主治医が受診を勧めたりしている背景が明らかになった。診断では、慢性一次性疼痛の患者が約半数（50 名）で、そのうち慢性一次性筋骨格系痛（23 名)、慢性一次性頭痛・顔面痛（12 名)、慢性一次性全身痛（9 名）が多く、慢性一次性内臓痛（６名）は比較的少なかった。身体に明らかな器質的疾患が見つからない、機能的な障害による痛みの患者は、治療に難渋することが多いため、集学的な痛みセンターに紹介されてくる。慢性二次性疼痛の中では、慢性二次性筋骨格系痛（20 名)、慢性神経障害性疼痛（16 名)、慢性外傷後・術後痛（9 名）が多かった。がん治療後（1 名)、二次性内臓痛（血管要因１名)、診断不能症例１例は少なかった。当院における診断の分布は、例年ほぼ同様の結果が得られている。一方、重篤度を評価すると、多くの患者が、中等度から重症の痛みで長期間苦しんでいることも明らかになった。

多職種介入では、運動療法の介入頻度の伸びが大きかった。その中で、症例によっては、介入期間が長くなり過ぎてしまう課題が見つかった。

院外から紹介された患者の紹介元病院の地域を調査すると、名古屋市内が最も多く 23 名であった。愛知県内（市外）から紹介の 17 名は、名古屋周辺（8 名：弥富市、海部郡、一宮市、春日井市、瀬戸市、長久手市）の市町村、三河地区（7 名：岡崎市・安城市、蒲郡市)、知多地区（2 名：知多市・半田市）から紹介があった。愛知県では、平成 30 年に 4 大学病院と基幹病院・クリニックの 25 施設を連携病院とした痛み診療体制の基盤を構築し、その数を増やしてきた。連携施設からの紹介患者は、12 名と、まだまだ少ないが、予約の取りづらさが問題と認識している。連携施設との連携強化のために、2 施設（計 10 回）とのカンファレンスを行い、連携上の問題、症例対応につき有意義な討論ができた。交流を深め、お互いの診療レベルを向上することができた。

慢性痛診療において、多職種介入が重要となる。当院では、麻酔科・ペインクリニック医、整形外科医、精神科医、漢方専門医に加え、看護師、理学療法士、公認心理師、薬剤師などの専門家が集まり、毎週木曜日に 1 時間をかけて症例カンファレンスを行なっている。カンファレンスでは、生物・心理・社会モデルで患者を捉え、患者中心の治療方針とゴール目標を立てるように心がけている。新患だけでなく、治療途中の患者についても再評価や方針の検討をおこなっている。緩和症例のコンサルトもカンファレンスで行っている。2022 年度は、慢性痛初診の患者を中心に 185 症例の多職種カンファレンスを行うことができ、診療に活かされた。

さまざまな痛み分野における最新の知識を学ぶ講習会を通じて、チームで取り組む慢性疼痛診療を学ぶ機会を提供した。本年度は、15 の講演会・研修会（約 22 時間）を企画した。もう一つ双方向性のオンデマンド研修会を行い、最新の知識をアップデートできた。事後アンケートでは、66.7%が非常に良かった、33.3%が良かったと参加者の満足度は非常に高い研修会となった。今後、取り上げてほしい内容として、慢性痛の診断（58.２%)、症例検討（54.5%）が高かった。

教育や自己研鑽に関して、ワークショップ、研修会への出席や、いたみマネージャーや公認心理師など慢性痛診療に関わる専門資格取得を推奨し、スタッフの育成に勤めた。令和 4 年度には、当院スタッフから、いたみ専門医・専門医療者 1 名（看護師)、公認心理師 1 名（精神科医）の資格取得者を排出しできた。

E．結論

当院いたみセンターは、開設後 5 年が経過した。今回、6 年目に入る 2022 年度のいたみセンターの診療状況を調査し、その活動実績について報告した。慢性痛患者への治療介入には、多職種の協力がなくてはならない。全国の痛みセンターと協力しながら、診療技術のアップデートが必要であると共に、地域医療スタッフへの教育や研修も継続的に行い、マンパワーを充実させていくことが重要である。

全国各地域において、痛みセンターの開設が毎年、確実に増えてきている。慢性痛診療を行う連携施設も徐々に増えてきていることは、患者にとって大変喜ばしいことである。痛みの診療は各診療科にまたがる幅広い領域となるが、整形外科、麻酔科、内科の連携施設に加え、精神科・心療内科の専門家に加わっていただくことも、重要かつ喫緊の課題と考える。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G．研究発表

1. 論文発表

1. Mie Sakai, Masaki Kondo, Takeshi Sugiura, Tatsuo Akechi. Acceptance and Commitment Therapy in the Transdiagnostic Treatment of a Breast Cancer Survivor: A Case Study, Japanese Psychological Research, 2022.
2. 杉浦健之. 痛みを訴える透析患者にどう対応するか 痛みの定義と病態機序. 臨床透析 38(9), 1149-1154, 2022
3. 杉浦健之、牛田享宏、川口善治、丸山一男. 痛み診療ネットワークと医療スタッフの養成・連携の必要性：東海北陸ブロックにおける取り組み. 現代医学 69(1), 40-43, 2022
4. 酒井美枝. 診断横断的かつナラティブなアプローチとしてのアクセプタンス＆コミットメント・セラピー ー慢性広汎性疼痛への治療戦略を一例としてー ペインクリニック 43, 1115-1121, 2022
5. 松平 浩、酒井美枝、笠原 諭、二瓶健司、近藤真前、荒瀬洋子、谷津田尊寛、本幸枝、谷本真実、杉浦健之、矢吹省司、髙橋直人. 慢性疼痛に対する新たな心理社会的フラッグシステムの開発. 慢性疼痛 41, 22-34, 2022
6. 酒井美枝、杉浦健之、青木晃大、永田富義、山本恵美子、近藤真前. 否定的な反復的思考の軽減とセカンドライフの充実にアクセプタンス＆コミットメント・セラピーが有用であった一次性慢性痛の症例. 慢性疼痛 41, 206-210, 2022
7. 酒井美枝、武藤 崇. アクセプタンス＆コミットメント・セラピー（ACT）から見たマインドフルネス 心理学評論 64, 452-459, 2022
8. 杉浦健之. いたみセンターにおける慢性痛のチーム医療(会議録) 日本ペインクリニック学会誌 29, 109, 2022.
9. 加藤利奈、杉浦健之、酒井美枝、草間宣好、藤掛数馬、祖父江和哉. 心理療法と漢方療法の併用が有効であった過敏性腸症候群の 1 例. 日本ペインクリニック学会誌 29, 5-8, 2022

2. 学会発表

1. 太田晴子、杉浦健之ら. 混合性結合組織病に合併した三叉神経障害の症状緩和に星状神経節ブロックが有効であった一例. 日本ペインクリニック学会第 55 回学術集会（2021.7.22-24、富山、ハイブリッド）
2. 永田富義、近藤真前、藤掛数馬、太田晴子、青木晃大、杉浦健之. 痙性斜頸に対して集学的治療が奏功した一例. 第 14 回日本運動器疼痛学会 （2021.11、WEB）
3. 杉浦健之ら、顔認識アプリを用いた痛みの表情解析. 第 43 回日本疼痛学会（2021.12.11、WEB）
4. 酒井美枝、杉浦健之ら. 反すう軽減とセカンドライフの充実にアクセプタンス＆コミットメント・セラピーが有用であった一次性慢性痛. 第 51 回慢性疼痛学会（2022.2.19-20、WEB）
5. 酒井美枝、杉浦健之ら. 当院いたみセンターに紹介された慢性痛患者像の把握と多職種介入内容の検討. 日本ペインクリニック学会第 2 回東海・北陸支部学術集会（2022.2. 26、WEB）
6. 加藤利奈、杉浦健之ら. 治療に難渋した硬膜穿刺後頭痛の褥婦に対し当帰芍薬散が有効であった 1 症例. 日本ペインクリニック学会第 2 回東海・北陸支部学術集会（2022.2.26、WEB）

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし